

試論ベルナール＝ラザール（上）

——ドレフュス事件からユダヤ・ナショナリズムへ——

菅野賢治

ただ一人、ユダヤ民族の政治的状态という基本的な事実からある新しい政治的カテゴリーを作り上げようとしたベルナール・ラザールについては、思い出さえ残ってはいない。

ハナ・アーレント、「隠された伝統」⁽¹⁾

すでにわれわれは、ベルナール＝ラザール著『誤審——ドレフュス事件の真実』（一八九六年）、『誤審——ドレフュス事件、第二の意見書』（九七年）、『いかにして無実の人間を罰するか』（九八年）に幾度となく言及し、それに依拠してドレフュス事件論を書き進めてきた。⁽²⁾ その三冊の誤審告発の書によって、ベルナール＝ラザールの存在はドレ

フュス事件前半（九四〇九七年）の歴史そのものといつてよい。⁽³⁾

彼が一八九五年からドレフュス家との接触に入り、事件に深く関わってゆくこととなつたいきさつ、そして九八年論争の主導権をゾラに譲って完全にドレフュス事件の表舞台から退いてしまう事情については、ほかのところで触れた。⁽⁴⁾ここでは再度、彼の文筆活動、ジャーナリスト生命には、まず反ユダヤ勢力によって、ついでドレフュス主義そのものによって、いわば二度終止符が打たれたという事実を強調しておこう。すなわち、一八九六年十一月、彼が九十四頁の小冊子『誤審——ドレフュス事件の真実』を携えて「裏切者」ドレフュスの擁護に乗り出したと知れたとたん、保守系の文芸紙誌、出版社の門戸がすべて閉ざされる。それ自体はなかば避け難く、ベルナール・ラザール自身十分覚悟の上だったとしても、共和派左派の諸新聞もが（のちに再審派の先鋒となるクレマンソーの『ロロール』紙を含めて）、九八年以前にはドレフュス冤罪説の受け入れ難さから、そして九八年以降にはドレフュス派内部に歩調の乱れをきたす恐れから、ベルナール・ラザールの過激な発言、行動を封じ込めようとした。ベルナール・ラザールにとって、再審の実現、ドレフュスの釈放は、必要不可欠なプロセスではあつても最終目的ではなく、主眼はあくまで九四年裁判の欺瞞を白日のもとにさらけ出し、軍内部と言論界はもとよりフランス社会全体を根本から冒している反ユダヤ主義を、その病巣まで遡って粉碎することにあつた。事件の意味に関していっさい妥協を許さない彼の姿勢、敵の欺瞞のみならず味方の戦略そのものにも向けられはじめた彼の批判精神は、政治化したドレフュス主義陣営にとつて、もはや益よりも害をもたらしものとして忌み嫌われたのである。こうして、ゾラによる「我弾劾す！」の直接の典拠となつたともいわれる参謀本部糾弾の書、『いかにして無実の人間を罰するか』（九八年一月）の刊行をみたところで、「他の人々のなすにまかせ、沈黙してほしい」というマチウ・ドレフュスの要請を容れ、ベルナール・ラザールは事件論争から完全に退いてしまう。

一方、事件史とは別の文脈において、ベルナール＝ラザールは、テオドル・ヘルツルが主導したシオニズム運動の最初の理解者——そして最初の離反者——として現代史に名をとどめてもいる。⁽⁷⁾ ヘルツル自身、一八九五年一月、新聞記者として滞在していたパリにおいてドレフュス大尉の位階剝奪式に立ち会い、パリの民衆に染み渡った反ユダヤ感情を目的の当たりにして以来、ユダヤ人国家の建設を構想するにいたったといわれているが、翌九六年二月、ウィーンで刊行されたヘルツルの『ユダヤ人国家』に、フランスでいち早く呼応したのがベルナール＝ラザールであった。しかし、二年後の一八九八年、バーゼルで開催された第二回シオニスト大会において、ベルナール＝ラザールは、既存国家の似姿としてユダヤ国家を創設することはユダヤ問題の根本的解決を意味するものではないとの判断から、ヘルツルと袂を分かたつ。結果的に、旧ドレフュス派知識人たちからも、シオニズム運動からも完全に孤立し、ペギーのいう真にユダヤ的な「放浪」の生活を余儀なくされた彼は、癌との闘病生活のなかで書き始めた『ヨブの積薬』を完成させることもあたわず、一九〇三年、孤独のうちに三十八歳の生涯を閉じる。⁽⁸⁾

一体、ベルナール＝ラザールはドレフュス事件のなかに、何を、どこまで見通していたのか？ ドレフュス派内部においてさえ敬遠されるほどの、そのラディカルな反ユダヤ主義批判の原動力はどこにあったのか？ そもそも、南仏ニームで織物商を営むユダヤ系の家庭に生まれ育ちながら、ユダヤの信仰、教義、生活習慣からは完全に解き放たれており、旧態依然の宗教と生活態度に固執するユダヤ教徒の集団に批判的な目を向けていたという点では、多くのいわゆる「同化ユダヤ人」の例に漏れず反ユダヤ的でしたらあったベルナール＝ラザールが、自ら文壇の名声とジャーナリスト生命を犠牲にしてまで、一ユダヤ系将校の冤罪事件に固執したのはなぜか？

以下に、その経緯をめぐり、近年一冊にまとめられたベルナール＝ラザールの論集『ユダヤ人と反ユダヤ主義者たち』と、マイケル・R・マラス著『ドレフュス事件当時のフランス・ユダヤ人』そして、ネリー・ウィルソンによ

る詳細なベルナル・ラザール伝を主たる典拠としながら論を進める。⁽⁹⁾そこでわれわれは、ベルナル・ラザールの独特なユダヤ史観と、その絶え間ない変遷、揺らぎを觀察することとなる。

《ユダの栄光と終焉》

ラザール・マルキウス・ベルナルは、一八六五年六月十四日、南仏ニームの織物商、ジョナス・ベルナル、ノエミ・ルジェのあいだに生まれた。母ノエミはトゥールーズ出身であり、年代記によつてはガロ・ロマン時代にまで遡るとされるラングドック地方最古のユダヤ教徒の一族に連なる。他方、父方の系譜は、一七九三年、大革命のさなかにドイツから渡つてきた行商人、マルキウス・ベルナルに発している。マルキウスは、ニーム生まれのサージュ・イスラエル・スイスと結ばれてラザール・ベルナル（ベルナル・ラザールの祖父）をもうける。ラザールは、やはりニームのユダヤ系女性と結婚し、ユダヤ居住区に小さな仕立屋を構える。一八三七年、この居住区で生まれたジョナス・ベルナル（ベルナル・ラザールの父）が店を引き継ぎ、第二帝政末期、事業の拡張に成功、まもなくユダヤ居住区を捨てて、店舗、私邸ともにニーム有数の大通り沿いの一角に移す。⁽¹⁰⁾

ニームのユダヤ居住区の歴史は古く、おおよそ七世紀にまで遡るとされる。十五〜十六世紀、スペインでの迫害を逃れて移住してきたユダヤ教徒たちを受け入れ、共同体は一時急速に拡大したが、その後、幾度にもわたる追放令、迫害、略奪の対象となり、十八世紀の末には三十ないし四十家族にまでその数を減じていた。⁽¹¹⁾続く革命期、まさにユダヤ人「解放」の時期に、その小さなユダヤ共同体に接ぎ木されるように成立したベルナル家は、三代目ジョナスの代に、いわゆる「同化」の時代を迎えたといえるだろう。ジョナスは、ユダヤ社会との絆を保ちながらも非ユダヤ

社会に積極的に交際の幅を広げていった。十九世紀、ユダヤ系住民の戸籍原簿には、まだヘブライ文字の署名が大半であったのに対し、ジョナスとノエミとの婚儀に際しては、証人として非ユダヤ系とおぼしき人物の名が記録され、署名もフランス語でおこなわれているという。ジョナス自身は、ユダヤの教義、生活習慣を厳しく守りながらも、ノエミとのあいだに生まれた四人の息子たちはラビのもとに送らず、はじめからフランス共和国の公教育制度のもとで、非宗教的教育のみを受けさせた。一家でシナゴグへ足を運ぶとしても、年に二、三度、特別な祭日に限られていたであろう。家庭内でもユダヤの伝統的な生活習慣の基本を遵守するにとどまり、ユダヤ教の信仰を強制するようなことは決してなかった。フランス革命以後、共和主義に同調しながら徐々に「解放」「同化」を実現していったフランス・ユダヤのあり方をなぞるような、典型的ユダヤ系一族といつてよい。

二十一歳までニームの親元にとどまったベルナル＝ラザールの青年時代に関する記録はほとんど残されていないが、伝記作者ウィルソンも推測するように、若きベルナル＝ラザールは、ブルジョワ家庭の形骸化したユダヤの教義、習慣からはほとんど影響らしきものを受けず、他方、共和国の公教育に対しても、まさにそれが「解放」の救済主として、社会的成功をおさめたユダヤ・ブルジョワジーから積極的に支持されたものであるという理由から、漠然とした反発を覚えていたらしい。そして、パリの文壇、思想界の事情に通じた従兄弟エフライム・ミカエルの感化のもと、精神の絶対的自由の保証を求め、無神論に傾き、前衛文学に対する憧れをつのらせながらニーム時代を過ごしていたものと思われる。⁽¹²⁾

彼がパリに向けて出発した一八八六年は、奇しくも、のちに彼の最大の論敵となるエドゥアール・ドリュモンが『ユダヤ人のフランス』を世に送り出した年であった。十九世紀最大のベストセラーともいわれるこの有名な書物とその社会的反響については他の研究に譲ることとし、⁽¹³⁾ここではドレフュス事件発生（九四年）以前のベルナル＝ラ

ザールにおけるユダヤ觀を嚴密に見極めておかねばならない。

パリで文筆活動を開始した頃のベルナル＝ラザールが、ドリユモンの著書に煽られるように燃え広がっていった反ユダヤ主義をどのように受けとめていたか、街頭の「ユダヤ人に死を！」という叫びをどのように耳にしていたか、という点については、今日、具体的資料、証言を欠いている。ウィルソンは、彼が若い文学者の集うサークルで反ユダヤ感情の激しい発露にさらされ、内心深く傷を負っていたとしているが、⁽¹⁴⁾そのことを示すエピソードのたぐいも特に伝えられていない。ただ、一八八〇年代後半、ドリユモンと直接の論戦を交わす以前のベルナル＝ラザールが、日々の新聞に洪水のように溢れ、絶えず人々の口の端にかかり始めた反ユダヤ主義を前にして、自らのユダヤ系の出自を、まず自分自身に対して定義し直す必要に迫られていたことは確かである。

そのことを如実に示す、興味深い初期小品がある。

——ユダよ、泣くのではない。

ユダは答えた。

——わたしは、主であるあなたを手にかかけました。そうして身を滅ぼしてしまいました。わたしをお許してください！「……」

——おまえは罪を犯したのではない、ユダよ。おまえは、ひとつの業を成し遂げたのだ。「……」おまえは天上で祝福され、わたしの右に座するであろう。

——あなたがパンをお与えになった時、悪魔がわたしの心をとらえたのです。

——それは行われるべくして行われたのだ。おまえは選ばれていたのだ。すでに、わが預言者エレミアがそう告

げていたではないか。

——なぜ、わたしだったのです、主よ？

——誇りに思うがいい、ユダよ。はじめから、わたしはおまえを選んでいたのだ。「……」わたしの栄冠には、おまえの汚辱が欠かせないのだ。「……」ラバンの子よ、シボレの子よ、わたしがおまえを過ちの重みに傾がせておこうと思ったのは、至高の啓示がおとずれるであろうその日、傲慢な学者どもに思い知らせてやるためなのだ。その日こそ、学者どもは、罪深き男ひとり、女ひとりが、彼ら全員を束ねたのと同じほど救いに寄与しているということを認めることとなるのだ。「……」父親殺し、姦淫者のおまえが、みずからの罪に倦み果て、わたしの膝に口づけをしにやってきた、あの晩、わたしがおまえを迎え入れたのは、いずれおまえがわたしを売り渡すこととなるよう欲したからなのだ。あの時、わたしは言っておいたではないか、「おまえがなすべきこと、それを今すぐにおこなえ」と。「……」最後に聞きなさい、わが子よ。

——主よ、お話しください。

——わたしは、おまえの痛みを鎮め、おまえの苦悩をやわらげようと、こうして再びジュデの国に下った。おまえの涙に心を裂かれる思いがしたので、慰めようとやって来たのだ。だが、なんびともおまえの口から今述べた言葉を伝え聞くようなことがあってはならぬ。おまえが手を染めた、その業を完遂せよ。おまえの最期が、おまえの生を義となすように。⁽¹⁵⁾

イエスの霊は、こう告げて姿を消す。ユダは、イエスに命じられたとおり、誰も彼の口からこの秘儀を伝え聞くことのないよう、また、彼の生がその最期によって「義とされる」「正当化される」ように、イチジクの枝に麻の綱

をかけ、首を吊る。ベルナルル・ラザール著『伝説の鏡』に収録された「ユダの栄光」から、やや長くなったが、部分訳を掲げた。

ユダの自害に先だってイエスの霊が彼の前に姿をあらわし、すべては「行われるべくして行われた」のであり、ユダはあらかじめ定められた業を完遂しているに過ぎないのだと告げるといふ、この筋書きが、なんらかの異端の「伝説」を下敷きになっているのか、あるいはベルナルル・ラザールの純粋な創作なのか、詳らかにしない。いずれにせよ、このイエスとユダの対話の後、地の文の中で開示される「ユダの栄光」という章題の皮肉な意味に、誤解の余地はない。

聖なる汚辱にまみれ、彼「ユダ」は罪によって生きてきた。いまや、彼は罪によって滅びなければならなかったのだ。「人をあやめてはならぬ」、これが今なおガラリヤ中に響きわたっている掟であった。しかも、もっとも厭うべき人殺しとは意図的に自らの生を絶つことではなかったか？ 彼は運命の命じるところを理解していた。彼こそは、正しき燔祭ホロコーストに約束された生贄ホロコーストであった。彼は究極の、罪深き、正当なる奉納を実現せねばならなかったのだ。⁽¹⁶⁾

ユダが罪によって滅びること、正当な生贄として捧げられることこそが「ホロコースト」の究極の意味である……。二十世紀の忌まわしい記憶が付着してしまった、この言葉のリフレインに、今日の読者は一種の衝撃を受けずにはいられない。しかし、この一文にこそ、ベルナルル・ラザールを含む十九世紀末ユダヤ系知識人にとってのユダヤの伝統という、複雑、かつきわめて微妙な問題系が凝縮されている。

当初、ベルナール＝ラザールは、精神の自由の印、またはその第一条件として、脱宗教化を何らかの形で打ち出しているような思想に糧を求めていた。彼の育った家庭環境を形成していたのは、いまだ「解放」を遂げていない（あるいは、遂げようとしていない）ユダヤ教徒たちからは一定の距離を保ち、彼らを哀れむと同時におそらく恥とさえみなしながら生きている、そのような「フランス共和国化」したユダヤであった。その環境が、若きベルナール＝ラザールを、当時すでに時代遅れの形骸化したものとされていたユダヤ教から引き離す方向に働いたのは疑うべくもない。さらにここで、西洋文明にとってユダヤの伝統が意味するものという問題系をフランスにはじめて導入し、次世代、ベルナール＝ラザールを含む若いユダヤ系知識人たちすべてに、最も深い、ある意味では最も深刻な影響を及ぼした思想の主の名をあげておかねばならない。近代フランス・ユダヤ社会に、いにしえのイスラエルの栄光に対する敬意と同時にユダヤ教への軽蔑を教え諭し、キリスト教に吸収され浄化されてしまった預言者たちの伝統に属することを誇りに思うと同時に、ラビの伝統、タルムードの教えを、もはやあらゆる存在理由を失った不毛なものとして棄却すべきであることを彼らに諭した知的権威、それはエルネスト・ルナンであった。⁽¹⁷⁾

われわれがほかのところで描き出しておいた、ルナンとユダヤをめぐるパラドックスが、ここで、ルナンに最大の知的権威を見いだし、その歴史観の磁場のなかで思想形成を遂げた、ベルナール＝ラザールを含む世紀末のユダヤ系知識人たちにおける内面のパラドックスとして再生される。ルナンは、十九世紀最大のヘブライ文献学者として、従来のキリスト教正史にあつて軽視されがちであった旧約の世界を史実として生き生きと描き出し、古イスラエルの輝かしい歴史を蘇らせながら（『イスラエル民族の歴史』全五巻、一八八七―一八九三年）、その一方で、現代の視点、未来のヴィジョンとしては、「インド＝ヨーロッパ族にとっての進歩とは、あらゆる次元においてセム的精神から徐々に遠ざかることに存する」と結論づけた。イスラエルの使命は確かに偉大であった、しかし、今日その使命は果

たされ、キリスト教と科学によってとうに乗り越えられてしまった。一神教の概念をキリスト教に、ヘブライの知恵をヨーロッパの科学に譲り渡した後、もはやユダヤ教徒がなすべきことは何もない、と。

そのルナンから、十九世紀末のフランス・ユダヤは、過去のイスラエルの栄光に対する敬意と、残存するユダヤ教への軽蔑とを同時に受け継いだ。キリスト教に吸収され浄化されてしまった預言者たちの伝統に属することを誇りに思うと同時に、もはやあらゆる存在理由を失った不毛なものとしてラビの伝統を棄却するという、近代の「同化」ユダヤ人たちの態度は、事実、「ユダヤ教→キリスト教→科学」というルナン式ヨーロッパ文明進化の図式に完全に即したのとなっていたのだ。マイケル・R・マラスも注意を喚起しているように、ルナンによる「ユダヤ人種」の概念は、反ユダヤ主義の理論的根拠として最大限に利用された反面、ユダヤ教徒の「啓蒙」、近代社会への「同化」を促す理論として、まずユダヤ系知識層に広く受け入れられていた。啓蒙の思想、大革命の記憶にフランス・ユダヤを結びつけ、共和国のなかで彼らの占める位置に歴史的正当性を付与するものとして、ルナンの文明史観が欠かせないものになっていたのである。⁽¹⁹⁾啓蒙思想、共和主義、ルナン、ユダヤ同化主義という、一般の思想史、文学史においてはほとんど同次元で扱われることのないいくつかの項目が、こうして一直線上に整列する。ルナンを「ヒトラーの」第三帝国に一世紀先んじてセム人とアーリア人の死闘を社会の深層部のみならず、世界史の中枢に位置するものとした⁽²⁰⁾現代反ユダヤ主義の先駆的理論家、と断罪して事足りるとする見解が皮相的であり、また至極危険でもあるのは、こうしたルナン思想の影響力の両義性を見落としているからにほかならない。

ベルナール・ラザールの「ユダの栄光」は、ルナンのテーゼをさらに押し進め、文明史の皮肉を過酷なまでに突き詰めたものである。キリスト教のアルファたるイエスは、ユダヤ教のオメガたるユダを、はじめから、その罪による滅亡のために選んでいた。オメガの汚辱が、新次元のアルファのために欠かせない要因であったのだ。よって、反ユ

ダヤ主義がキリスト教の文脈から持ち出してくる「裏切り」「イエス殺し」は実のところ罪の行いではなく、予定調和の実現にはかならなかった。その使命を果たした今、ユダのなすべきことは、自ら消滅することによってその過去を「義となす」こと以外にない。主の言わんとするところを理解し、「ホロコースト」の運命に身を捧げたユダの名こそ讃えられよ……。

自らあらゆる既存宗教から解き放たれており、また世界は早晩、脱宗教化を免れないという原則に立脚する初期ベルナル＝ラザールにとって、古きユダヤ教の信仰、ユダヤ的生活習慣を捨てきれずにいる現代のユダヤ教徒は、文明史の理に身を合わせ損ねた軽蔑の対象にはかならない。また、翻って、二千年前に消滅を運命づけられたユダヤの残滓を現代生活のなかに嗅ぎ回り、それをいたずらに誇張することによって無知な大衆の怨恨と社会的不満を煽り立てようとするドリュモンら、反ユダヤ主義者たちの試みは、はじめから全く根拠を欠いた、的はずれな議論としか映らない。少なくともドレフス事件以前のベルナル＝ラザールにとっては、これが「ユダヤ問題」のほぼすべてであった。

《同化主義（アシミラシオニズム）》

こうして、すでに『ラ・リーブル・パロール』創刊の二年前、一八九〇年頃から、ドリュモンを筆頭とする反ユダヤ主義者たちに激しい論戦を挑み、また、その論争に歴史的、実証的資料を提供すべく『反ユダヤ主義、その歴史と原因』（一八九四年春刊行）執筆にむけて詳細なユダヤ史研究に着手しながら、翻って、いかなる形であれユダヤ的なるものに現代的価値を認めることのできない、「非ユダヤ主義」とも呼ぶべき初期ベルナル＝ラザールの立場が

あきらかになる。

彼の初期論考に沿って、その概要を示そう。

ベルナル・ラザールのユダヤ論は、われわれが別のところで分析を試みた、人類学・生理学・遺伝学的「ユダヤ性」の理論から⁽²¹⁾はつきり一線を描ることから始まる。彼によれば、従来のセム民族研究者たちは、セムに好意的であるか、その敵を名乗るにかかわらず、一様に「民族の恒久性」「単一性」という誤謬に陥っている。彼らは、イスラエルの民がローマ帝国の侵略を受け、「離散」を余儀なくされた時点で、あたかもそれが均質な単一民族を構成していたかのごとく考えている。それは明らかな誤りであって、すでに「離散」以前、イスラエルはいくつもの小民族に分裂しており、他民族ともすでに交わり始めていたというのが事実である。したがって、二千年近くを経た今日、ユダヤ系と言われる人々の身体的、心理的、民族学的特徴から「ユダヤ性」なるものを科学的に引きだそうとする試みは全く意味をなさない。「中国のユダヤ人、インドウのユダヤ人、ポーランドの、ロシアのユダヤ人、ドイツのユダヤ人、スペインの、フランスの、あるいはイタリアのユダヤ人、アルジェリアのユダヤ人、アビッシニアのユダヤ人をそれぞれ一人ずつ選んで並べてみるがよい。信頼に値する民族学者が、そこから世間で揚々と公言されている民族の恒久性に関する理論を果たして引き出せるものかどうか、試してみるがよい。」⁽²²⁾

また、ユダヤを宗教の議論に限定することにもさしたる意味がない。マホメットが現れてその教義を禁止する以前は、多くの地中海部族、アラブ部族がユダヤ教徒との接触によってユダヤ教に改宗した。逆に、近代、特に大革命後のフランスにおいては、急速な勢いでユダヤ人の「同化」が進み、ほとんどのユダヤ教徒はもとの信仰を完全に捨ててカトリックに改宗するか、あるいは何も代替信仰を抱かずに、自然に「共和国化」を果たした。よって、今日、厳密に「ユダヤ」の名称に値するのは、カトリック教徒、イスラム教徒、プロテスタントなどと並列の位置を占める「ユダ

「ヤ教徒」だけのはずである。ところが、実際の反セムの感情はユダヤ教徒のみならず、はるか遠い過去にその祖先がなんらかの形でユダヤ教に関わった（とされる）人々すべてに対して差し向けられる敵意、憎悪である。反セムの感情の根拠を宗教の次元に帰着させることは、したがって無意味であるばかりか、逆に問題を矮小化し、反セム主義者に議論の口実を与えてしまうことになる。実際、反セム主義を名乗るものたちには、自らとうにキリスト教信仰を捨てていながら、ユダヤを語る時に限ってキリスト教に摺り寄り、ユダヤ教とキリスト教のあいだの消し難い差異を強調しようとする者が多い（モリス・パレスと、のちのアクション・フランセーズの面々にその傾向が顕著である）。それに対し、信条の相違などというものは各時代、個別的なレベルで生じる歴史的偶然事^{コンタジェンシヤ}に過ぎず、脱宗教化のすむ十九世紀末のヨーロッパにおいて、それは断じて反セム主義の根拠たり得ないということを、ベルナル＝ラザールははっきり確認しようとする。

「十字軍」を語の絶対的なる意味において受け入れるためには、信仰は今日あまりに弛緩している。イスラエリットたち自身の側でも、もはや堅い信仰心など持ち合わせていない。「……」ヘブライの宗教が愚昧な理性主義に陥ってからすでに久しく、今日、それは自らの教義を「人権宣言」から借りてこななければならないといったありさまだ。プロテスタンティズム同様、ユダヤ教も、ある重要なことを忘れてしまっている。神秘なき宗教などというものは、脱穀した後の麦莖に等しい、という事実である。⁽²³⁾

こうして、「イスラエリット」(Israelite)と「ユダヤ人」(Jui)とが、明確に区別されるべき二つのカテゴリーとして打ち出されることとなる。初期のベルナル＝ラザールのみならず、当時、反ユダヤ主義の根拠を理論的に突

き崩そうとする人々の議論は、おおよその点に集中した。すなわち、フランスの「イスラエリット」とは、確かに古きユダヤ姓を名乗るユダヤ教徒の末裔であるが、そのほとんどは信仰を捨ててすでに久しく、大革命以来、納税、徴兵の義務に等し並みに応じ、国家に寄与してきた「市民」である。それに対し「ユダヤ人」とは、属する国家の別に全く関係なく、また、民族的、宗教的に定義されるものでもない。それは、もっぱら社会的に決定される人間の特性を指すものである。「ユダヤ」という言葉はムーア人にも、ユグノーにも、カトリック教徒にも当てはまる。彼らのもっぱら、そして常に、隣人をくいものにして自分の利益をはかるという唾棄すべき規範にのっとって行動する時、彼らはみなユダヤなのである。⁽²⁴⁾「いたるところ、人間は人間なのである。いたるところ、似たような悪徳と等しい美徳とを備えている。人間がどこから来たかなど、どうでもよい。人間をそれ自体においてとらえなければならぬ。個人だけが価値をもち、個人だけが、ある時は神々しく、ある時は軽蔑に値する。アーリア人の高利貸しはセム人の高利貸しと同程度に卑しく、セムの詩人は、それが良き詩人ならば、アーリアの良き詩人と同じ価値を有するのだ。」⁽²⁵⁾

ところが、反セム主義者たちは、「イスラエリット」と「ユダヤ」とを都合よく混同することによって憎しみの言説を成立させる。大革命によって市民権を得て以来、フランスの銀行、産業、政治に巧みに取り入り、大ブルジョワジーにのし上がった、ほんの一握りのイスラエリットたちが社会的にユダヤの特性といわれるもの（背任、強欲、吝嗇、狡知）を示すたびに、反セム主義者たちは民衆の怨恨をイスラエリット一般に振り向けようとする。しかし、平均的なイスラエリットは、土地を耕し、商いに専念し、制度に仕え、また芸術・学問に才を見出しながらごくあたりまえの生活を営む、他のフランス人となんら変わるところのない共和国市民なのだ。富裕イスラエリットたちを羨望するどころか、彼らと同じ「ユダヤ」の名のもとに一括されることでもっぱら不利益をこうむっているのは、そうし

た一般のイスラエリットたちなのである。「定見をもった反セム主義者 (antisemite) なら、むしろ反ユダヤ主義者 (antijuit) となるのがふさわしい。その時、彼らは味方として多くのイスラエリットたちを見出すこととなるだろう。」⁽²⁶⁾

二転三転する言葉の定義のよじれを戻すようにして読まなければならない。「ユダヤ」が「イスラエリット」とは無関係に存在し得る人間の特性を指すものである以上、「セム」という言葉に「ユダヤ」と「イスラエリット」を交錯させて語ることには中止すべきである、とベルナール＝ラザールは主張しているのだ。古くから『ヴェニスの人』などに描かれ続けてきた卑しき社会的特性としての「ユダヤ」に対する抵抗という意味で、正しく「反ユダヤ主義」を定義しなおすならば、まずイスラエリットたちの多数がそこに馳せ参じることであろう、というのである（そのような意味を明らかにするため、本章においては antisemitisme を特に「反セム主義」と訳してきたが、このことを確認した上で、以下、慣例的な「反ユダヤ主義」という訳語に戻し、それに統一する）。数百年の歴史をふまえ、フランスのユダヤ系市民の実状を明らかにした上で、「イスラエリット」に振り向けられた反ユダヤ感情がいかに根柢希薄なものであるかを示すこと、これが、初期ベルナール＝ラザールにおけるドリュモン批判、反ユダヤ主義批判の指針であった。

フランス国内のユダヤ問題について「非ユダヤ主義」の立場を明らかにしたあと、ベルナール＝ラザールは、「外」のユダヤ人に目を向ける。のちに、フランスにおける東欧ユダヤ人たちの最大の代弁者ともなる人物が、ドレフュス事件以前の論考のなかでは、彼らの存在に関し、否定の域を越えた、ほとんど断罪に近い見解を述べていたという事実、意外の念を禁じえないかもしれない。

ロシア、ポーランド、ドイツのユダヤ教徒たちは、彼らだけの間で連帯するに任せておけばよい。それは彼ら自身の問題だ。そうした諸外国のユダヤ教徒を精神的に高めてやる必要があるというのなら、彼らを治めている統治者がそれに従事すればよろしい。もし、治者たちが数多くのユダヤ勢力をうまく利用することができると思うならば、彼らに教育に施し、彼らの退廃、悪習のもととなっているタルムード学者の群れから彼らを引き離してやることだ。フランスのイスラエリットの立場としては、よその国を不当に食い荒らしに来る、⁽²⁷⁾ 獐猛、野卑、不潔なタタール族の不断の流入に可能な限り歯止めをかけ、堤防を築くのが当然である。

「獐猛、野卑、不潔なタタール族の不断の流入」とは、いうまでもなく、帝政ロシアでユダヤ排斥熱（ポグロム）が高まって以来、年々その数を増していた中央ヨーロッパからのユダヤ移住民を指す。モーゼス・メンデルスゾーンによる「ユダヤ啓蒙主義」を知ったドイツ、あるいは大革命による「共和国化」の過程を経たフランスとは大きく異なり、東欧のユダヤ人たちには、古いラビの伝統、タルムードの思想が根強く残っている。政治的解放のはるか以前の問題として、ユダヤ教からの解放というパールさえ越えていない彼らは、前述のルナンのユダヤ史観の見地から、文明史の流れに完全に乗り遅れた存在とみなされる。

初期ベルナル・ラザールのユダヤ論においては、隆盛する反ユダヤ主義からの「イスラエリット」擁護と、ユダヤ教徒の脱宗教化とが、まったく別の二つの事象としてとらえられており、後者は前者を問題とするための、はるか以前の最低必要条件と認識されている。そのことは、『反ユダヤ主義、その歴史と原因』の結論の一文によって、いっそうはっきりするだろう。

滅びつつあるのはタルムードの伝統ばかりではない。ユダヤ教そのものが死に瀕しているのだ。既存宗教のなかでもっとも古いこの宗教が、どうやらもっとも早く消滅することになるらしい。[……]ユダヤ教とともに、ユダヤ的精神も消え去るのである。⁽²⁸⁾

また、九三年十二月のある論説のなかでは、ユダヤ同化主義の綱領そのままに、

ユダヤ人たちが、それ「反ユダヤ主義」を逃れるための方法はひとつしかない。消滅すること、国民という大海のなかに紛れて、消えてしまうことである。⁽²⁹⁾

とまで言い切っている。

一步解釈を誤ると、純正反ユダヤ主義者の言説と見分けがつかなくなるほどの論断である。実際、『反ユダヤ主義、その歴史と原因』は、著者の死後、むしろ反ユダヤ主義者たちの典拠として利用され、特にのちのヴィシー政権下においては、グザヴィエ・ヴァラなどが一八九四年以降のベルナル＝ラザールを完全に捨象し、彼のユダヤ「消滅」というパースペクティブをユダヤ人自身によるユダヤ殲滅の正当化としてねじ曲げてしまった。以来、今日にいたってなお、この書物は、反ユダヤ主義、排外主義を標榜する出版社から版を重ねるといふ嘆かわしい状況にある。ウィルソンも、伝記の数ページを費やし、それぞれの版に付された序文、解説に逐一批判を加えながら同書に言及しなければならぬほどだ。⁽³⁰⁾ そもそも反ユダヤ主義の根拠を歴史的に問い直すための資料としてあったはずのものを、その文脈から切り離し、アポステリオリに二十世紀のユダヤの現実を正当化するものとして読み換える反ユダヤ側の常套

手段の犠牲となり、結局、途方もない誤解のうちに放置されてしまうという運命は、おそらくベルナル・ラザールのこの書物に限った話ではあるまい。

《哲学者の魂——アムステルダム・ゲットーにて》

一八九四年九月二十四日付けの『ル・ジュール』紙に、ベルナル・ラザールの短い紀行文が掲載された。彼が取材旅行中に立ち寄ったアムステルダムでの出来事を綴ったこの一文は、「哲学者の魂」と題されている。ドレフュス事件はまだ発生しておらず（『明細書』が陸軍統計局に舞い込んでくる頃である）、記事の内容自体も一連の反ユダヤ主義論争には無関係のものではあるが、のちのベルナル・ラザールにおけるユダヤ観の一大転機を予告するものとして、きわめて重要な意味をもつテクストである。

一日アムステルダムを歩き回り、夕刻、大通りの喧噪に疲れを覚えはじめた旅行者は、いつしか中心街を離れ、運河づたいにアムステル河岸に出ていた。そこから「夢想と欲求とに駆られ」るようにして橋を渡り、彼が足を踏み入れた川向こうの町、そこはユダヤ人居住区、ゲットーであった。

十三〜十四世紀のスペインにおいて、教皇の圧力と十字軍の影響から公然たる迫害にさらされ、一四九二年には根こそぎスペインから追放されたユダヤ教徒たちは、一時ポルトガルへ逃れ、さらにそこからも放逐されるにいたり、十六世紀末、大量にアムステルダムへ流れ込んだ。アムステル河の対岸の一面によせ集められた彼らは、その地を「新エルサレム」と名づけ、最初のシナゴークを建設する。その初代移入ユダヤ民の子孫たちにのちの東欧からの移民を加え、アムステルダム・ゲットーは常に人口密度を増しながら、十九世紀末までにはヨーロッパ有数のユダヤ

居住区となっていた。

正真正銘のユダヤ人に会おうとしたら、この場所だ。正真正銘のユダヤ人、つまり、みずからの種、諸民族の現実、ユダヤ祭儀の力強さ、ユダヤのしきたりの生命力、そういったものを信じているユダヤ人、みずからの生活習慣を持ち続けようとするユダヤ人のことである。曲がりくねった路地、泥まみれの街路、黒ずんだ壁、中心街の小綺麗さとはうって変わったこの汚さ。それがユダヤ人の住処だ。家の切妻にはヘブライ語の看板を掲げ、湿っぽくてとても入る気になれない地下倉に小店を構えている。物売りの台が表通りにせり出し、いんちき商売のがらくたが広げてある。夕暮れ時ともあって、作業場から家路を急ぐダイヤモンド職人、宝石細工師たちの群れ——皆、もしくはほとんどがユダヤ人——で、辻々は溢れかえっている⁽³¹⁾。

旅人はゲットーの西門へ回り、アムステルダム最古といわれるシナゴークを訪れる。ひととおり内陣を眺め渡し、再び外へ出ようとした彼は、白い大理石の石版に目をとめる。一六七〇年というシナゴークの建立の年と、当時の寄進者たちの名前を記念するその石版に、突如、「スピノザ」の一語が浮かび上がった。十七世紀、シナゴーク建設のための寄進者のなかに、哲学者バルフ・スピノザの親族がまじっていたのだろうか。

その時、私は理解した。その夕、私を導いていたのは、この哲学者の影だったのだ。私はふたたび外に出、路地と小さな広場を縫うように歩きはじめた。残る数時間を、彼とともに過ごすために。いまでは取り壊されてしまったが、最初のシナゴークがあったこの場所から遠くないブルクヴァルの、軒を並べる家々のどこかで彼は生ま

れたのだ。このポルトガル様式神殿の小さな赤煉瓦は、彼の同時代のものだ。彼もまた、この同じ道をさまよい歩き、その喧噪から孤独の味を引き出していたのだ。この場所で、彼はラビの言葉を聞き、無二の神の名が讃えられるのを耳にしながら、唯一の実体の着想を得たのだ。[……] 私には見えるような気がした。私の数歩前を、黒い巻き毛を長く垂らし、浅黒で頬のこけた陰鬱な顔、深く、悲しい目をした彼が歩いてゆく姿が。世間のあらゆる怒りにつまづきながら、最後まで許しの穏やかさのみを保ち続けた、あの物静かな思索者の姿が。なるほど、地上のこの一隅に命を吹き込んでいるのは、彼の魂であった。この頼りない土地を存続させているのは、彼の力だった。彼はこの場所を通過したのだ。ここで生活を営み、ここで苦しみ、破門にあい、そうして、ある夕、平和と瞑想のなかに生きる道を求め、ここを立ち去っていったのだ。貧しく、ただ永遠の本質への夢だけに心を委ねて……。いま、私を小突き、押し退けながら通り過ぎてゆく群衆のなかであって、現実のもの、生きているものの、それは彼の影だけであった。⁽³²⁾

「哲学者の魂」は、ここで閉じられている。

この夕、かすかではあるけれども、しかし確実に、ベルナルル・ラザールの想像力が「過去」へと、一瞬、引き寄せられたのではないか? 〈時〉の淵への垂直な落下の感覚に不意を突かれたものではなかったか?

一八九四年九月に発表されたこの文章は、若干の異同をもって、三年後、一八九七年の散文集『象牙の塔』に収められ、さらに明示的に「現在のなかの過去」と題された最終章を構成している。また、一八九七年三月六日、ロシア・ユダヤ人学生協会に招かれておこなった講演「ユダヤ・ナショナリズム」⁽³³⁾のなかでも、ベルナルル・ラザールは、アムステルダムの特トを訪れた時のこと、シナゴークでスピノザの銘に遭遇した時のことを再び取り上げている。

一体、このアムステルダム・ゲッターの一夕に、何が彼の内部に生じたのか？ スピノザの碑銘が、彼のうちに何を呼び覚ましたのか？

奇妙なことに、一八九四年の「哲学者の魂」と一八九七年の講演「ユダヤ・ナシヨナリズム」とのあいだには、同じ体験を描き出しながら同一人物の筆によるものとは思えないほどの「ずれ」がある。二つのテキストにおいて、明らかに最初のアムステルダム・ゲッター訪問の印象が語られているにもかかわらず、「ユダヤ」という語に付与された意味と価値とが、一八〇度といってよいほどの転換を遂げているのである。

一八九四年の「哲学者の魂」において、スピノザの銘との邂逅は単なる偶然事として語られている。アムステルダム最古という触れ込みの割には、どこにでもあるような平凡なシナゴグの内部に、旅行者が失望を感じて立ち去ろうとした矢先の出来事としてである。「そこには、心を引き付けるものは何もなかった。冷たい感じの木細工、腰掛けの不動の列「……」、律法の巻物が納められているアーチ。つまるところ、信者が、いにしえの恐るべき神と共にひとときを過ごし、決まった時刻になれば、エホバなり隣人なりと商売の話をするためにやってくる、何の変哲もないユダヤ祈禱の家なのだ。」「……」私は、あたりに命の通ったものを何も見いだすこともできず、そのまま外に出てしまっていたかもしれない。もし、突如、大理石の白い石版の上に「……」⁽³⁴⁾。

ところが、一八九七年のテキストでは、この場面が以下のように書き直されることとなるのだ。

そのような悲劇的な過去全体が、私の前に突如として立ち現れるように感じた、ある一日のことを思い出します。それはアムステルダムでのことでした。私は、あの神々しきスピノザの影を慕ってゲッターの道をさまよい歩き、ユダヤ教会によって追放されたその男のイメージをよりよく思い描こうとして、ポルトガル様式の古いシナゴ

グに入り、腰をおろしました。そして、言い伝えによるとパレスチナから取り寄せた木材で作られたという祭壇の前、スピノザ一族の名前が刻まれた大理石の石版に向き合った腰掛けに、長いあいだ座っていたのです。⁽³⁵⁾

さらに注目に値するのは、そのシナゴーグの中庭で偶然目にしたという、同じ東欧ユダヤ人たちの一群を描き出すにあたっての、完全な筆の持ち替えである。

私は神殿の中庭を横切った。そこは、飢えにさいなまれ、見るも無惨な姿になり果てた人間どもの群れでごったがえしていた。迫害の風によって、ロシアから、あるいはポーランドから追い出されてきた下賤の者ども。それが一団となって見学に訪れた者に襲いかかるものだから、見学者の方は、彼らの発する意味不明の叫びに呆然とし、度肝を抜かれるばかりである。〔哲学者の魂〕、一八九四年⁽³⁶⁾

外に出た時、シナゴーグの中庭で、ロシア・ユダヤ人たちが一時しのぎに寝泊まりしている様に遭遇した。私は、一気に過去の時代まで連れ戻されたような思いがした。ユダヤ逃亡民の群れが、略奪、拷問、火刑台を逃れて、四方の道に溢れ出た、あの過去の時代。悲惨、絶望、諦め、そして英雄的なまでの粘り強さ、そうしたものが織りなしてきた幾世紀もが眼前に蘇ってきた。伝説のアハスヴェルス（さまよえるユダヤ人）、あの永劫の惨めなさすらい人が、私の目の前を横切ってゆくように思われた。たとえ現代の反ユダヤ主義をもってしても、そうしたことをすべてを我々の記憶から抹消することはできない。〔ユダヤ・ナショナリズム〕、一八九七年⁽³⁷⁾

もはや疑問の余地はない。アムステルダム・ゲットーをめぐるテクストのこの『重ね書き』のなかに、ベルナール＝ラザールにおけるユダヤ・ナショナリズムの覚醒が位置づけられる。言い換えるなら、今日、我々が知るベルナール＝ラザール、ドレフュス主義の源流に位置する者、全ヨーロッパ的ユダヤの代弁者としてのベルナール＝ラザールは、この二つのテクストの差異のなかで生まれた。

〈象徴〉とは「時間と空間の外にわれわれを連れ去ってくれるような仮想のうちに、感情を呼び覚ましたものとなる対象とわれわれの魂とを融合させること」⁽³⁸⁾にほかならないという、シャルル・モリスによる象徴主義の定義をあえて援用するならば、九四年の秋、アムステルダム・ゲットーの一夜は、すぐれて象徴主義的な体験であったといつてよいのではないか。ゲットーの路地、数歩前を歩いてゆくスピノザの姿を思い描く瞬間、あるいは、シナゴークの中庭で雨風をしのいでいるロシア系ユダヤ移民に取り囲まれ、おそらくイディッシュ語なのであろう、その「意味不明の叫び」(clameurs jargonantes)への対応に窮しながら、群のなかに伝説の「さまよえるユダヤ人」の姿を認めたように思う瞬間、それは、現在に生じた一瞬の裂け目から過去へ通じる道が一気に開示されるといった、特権的瞬間ではなかっただろうか。ウィルソンもこの箇所に注目して述べているように、いまこゝを「侵食」してくる過去に、無防備の意識がしてやられる、そういった超時間的な体験ではなかっただろうか。⁽³⁹⁾

しかし、九四年秋、アムステルダム・ゲットーから持ち帰った印象を、みずから深く吟味する暇も与えられないまま、『反ユダヤ主義、その歴史と原因』の論理的帰結の意味を、その体験に照らして深く再考する余裕もないままに、ドレフュス事件が発生した。

《ドレフュス事件とユダヤ世論》

ベルナール・ラザールが一八九四年春刊行の自著のなかで、ユダヤ民族の終焉と、それにともなう反ユダヤ主義の自然消滅を結論づけた、その半年後に、フランスの反ユダヤ主義的精神のすべてが余すところなく発揮されることとなる出来事、また、将来のイスラエル建国の礎となるヘルツルの『ユダヤ人国家』執筆に直接の契機を与えたと言われる事件が勃発するとは、たしかに、なんという歴史の皮肉であろう。

一八九四年十月二十九日、ドリュモンの『ラ・リーブル・パロール』に「すっぱ抜」かれ、まもなく容疑者の名「アルフレッド・ドレフュス」も公表されたのちは、

その男は、セムの末裔の例にもれず、闇取引に手を染めている。かりに読者諸子が、いまこの男を捕え、その肩章で頬打ちをくらわせたあと、誤って銃殺してしまったとしよう。それでも、この男がそもそも持ち合わせていない、名譽、義務、祖国といったものに関する概念を、その頭にたたき込んでやることすらかなわないであろう。
 (『ラ・リーブル・パロール』、十一月六日)

嗜好と教育においてドイツ人、人種においてユダヤ人である彼は、ユダヤ人かつドイツ人としてふるまった。すべてはそれに尽きる。(同紙、⁽⁴⁰⁾十四日)

といった、専断的、かつ極めて攻撃的なトーンで報道されはじめた事件に、『反ユダヤ主義、その歴史と原因』の著者が目をとめないはずはない。「反ユダヤの動向について私の目はすでに肥えていた。日を追って事実関係を分析、吟味するなから、私の心には、事件が反ユダヤ主義による陰謀の結果であるという確信が生まれていた⁽⁴¹⁾。」と、彼はのちに述べている。実のところ、反ユダヤ主義がこれほどまでのことをやつのけるとは、ドリュモンの戯言にここまで人々の精神を蝕まむ毒があったとは、という驚きに近い気持ちだが、九四年十一月、ベルナル＝ラザールの隠さざる無媒介の印象ではなかっただろうか。

これにより、当然、自著の結論として打ち出していた反ユダヤ主義の自然消滅という見通しには修正が迫られることとなる。「新たなゲット」と題された十一月十七日の記事のなかで、ベルナル＝ラザールは数か月前までの予見の甘さを認めざるを得なかった。「われわれは、反ユダヤ主義の理論も理論家の面々もよく知っていた。ただ、エドゥアール・ドリュモン氏のような指導者につき従う軍勢はまだまだ小規模なものにすぎないと、誰しもがそう信じていた。われわれは誤っていた。そして、このドレフュス大尉に対してなされた告発だけで、われわれの誤りを克明に示すものとして十分であった。」⁽⁴²⁾ここから、ベルナル＝ラザールの論旨は左右に大きなぐらつきを見せる。たしかに、反ユダヤ熱が民衆のあいだでいかに高まろうとも、法治国家にかつてのようなユダヤ・ゲットが復帰するなどということはありそうもない。しかし、そうした物理的ゲットよりもさらに悪質、陰湿な、目には見えない「精神的ゲット」の壁が日々の空気のなかに張り巡らされ、そこへユダヤ人たちが新しいパリア階級として押し込められつつあるのを、敏感な者ならば察知せずにはいられない。それでも、こうした新種のゲットも一過性のものにすぎないだろう。ドレフュス事件を好機としてさらなる宣伝を試みる反ユダヤ主義者のもくろみは、期待はずれにおわるだろう。なぜなら——と、ここにいたって、まだベルナル＝ラザールは従来の自説に望みを託そうとして

いる——、「ユダヤ人種は、民族の寿命において死期という過酷な瞬間にある、つまり、それは臨終の時を迎えた人種である」⁽⁴³⁾のだから……。現実のドレフュス事件は、彼の思想に、まずこのようなオプティミズムの揺れこそを禁ずるものであった。

のちに出版界におけるドレフュス派の拠点となるストック社、社主ビエール・ヴィクトール・ストックの回想によると、マチウ・ドレフュスと面会する以前から事件に並々ならぬ関心を示し、すでに冤罪の可能性も示唆していたベルナール・ラザールに、なぜそれを公けの場で取り上げないのかと尋ねたところ、彼はこう答えたという。「ああ！もしそれがどこかの貧しい男だったら、すぐにでも心配してやるところだ。だが、ドレフュスとその家族は大金持ちだ！⁽⁴⁴⁾だっていうじゃないか。私などいなくても、きつとうまく切り抜けるさ。特に彼が無実である場合にはね。」ベルナール・ラザール自身が、翌九五年一月五日、士官学校の中庭で行われたドレフュスの位階剥奪式に立ち会った形跡はない。しかし、翌月、ドレフュスが流刑地である南米ギアナに到着した頃、マチウとドウマンジュ弁護士から協力を依頼され、彼らの保持していた裁判記録に目を通した時から、ベルナール・ラザールの指針は定まった。すなわち、この一件は軍部と世論を支配する反ユダヤ主義が産み落としたグロテスクな冤罪事件にほかならず、ドレフュスは、ユダヤ人であるという理由で、ユダヤ人として裁かれたのだという事実を歴史の前に明らかにしなければならない、という指針である。のちの『誤審——ドレフュス事件、第二の意見書』冒頭部、次の一節は、すでにこの時からベルナール・ラザールの脳裏にはっきりと浮かんでいたものにちがいない。

ドレフュス大尉はパーリア階級に属している。彼は軍人であったが、またユダヤ人でもあった。そして、彼はユダヤ人として告訴されたのである。彼はユダヤ人であったが故に逮捕され、ユダヤ人であったが故に裁きを受け、

ユダヤ人であったが故に有罪とされた。彼がユダヤ人であったが故に、誰も彼のために正義と真実の声をあげる
 ことができずにいるのだ。⁽⁴⁵⁾

しかし、ベルナール＝ラザールが、九五年二月に執筆を請け負い、同年夏、すでに初稿を完成させていたという第一の『誤審』は、なぜ翌九六年十一月まで出版されなかったのか？ 機密漏洩と陸軍に対する名誉毀損の嫌疑を引き受けて新たな法廷に身を呈し、そこで九四年のドレフュス裁判を呼び覚ますという戦略——のちにエミール・ゾラが採用することとなる戦略——が、九五年のベルナール＝ラザールに閉ざされてしまったのはなぜか？ この疑問に対して可能な説明のひとつを、「あのD……の奴が」なる秘密書類をめぐる錯綜した内部事情とともに、すでに別のところで提示しておいた。⁽⁴⁶⁾ここでは繰り返しを避けつつも、九五年から九六年のベルナール＝ラザールにもう一度論点を戻し、同じ問いを別の角度から提起し直す必要がある。すなわち、ただちに公論の場に出るというベルナール＝ラザールの戦略は、まさに事件を「ユダヤ問題」として政治化するというその主旨自体において敬遠されたのではなかったか。また、そもそもドレフュス本人、ドレフュス家の人々、そして彼らと同じような状況下におかれたフランスのユダヤ系市民は、事件をどこまで「ユダヤ問題」として認識していたのか、という問いである。

法律尊重主義と、政界・言論界の実力者への内密の働きかけという、一見矛盾する二つの方向を同時に採択したマチウ・ドレフュスとドゥマンジュ弁護士との態度、たしかに弱腰ともとられかねない彼らの慎重論を、ベルナール＝ラザール自身が表だって批判したことは一度もない。ただ、事件後にジョゼフ・レナックの『事件史』の資料として構成した覚え書きのなかで、当時の心境を回想し、以下のように淡々と報告するのみである。

その慎重さゆえにあらゆる表立った行動に出ることを恐れるドゥマンジュ弁護士によって、もしもマチウが引き留められるようなことがなかったならば、私はもっと早く動き出していたにちがいない。「……」この年「一九六六年」を、私は、期待と焦慮のうちに、行動への熱にかされるような気持ちで過ごした。私の行動についても、私の願望についても、打ち明ける相手は一人としていなかった。⁽⁴⁷⁾

この「期待と焦慮」、「行動への熱」、絶対秘密厳守の孤独感は、しかし、九六年のベルナルル・ラザールのテクストのなかに間違いないく投射されている。無実の人間が流刑地に繋がれてすでに一年以上を経たなお、それを知らなかったことにし、『誤審』の原稿を抽斗に留め置かねばならないという、やり場のなさ、表向きは相変わらずエドゥアル・ドリュモンを相手どった紙上論争のなかに微妙な影を落とし始めていることにわれわれは気づく。

恭順という古き伝統に忠実なユダヤ人たちは、隔世遺伝的な臆病さも手伝って、自分の身を守ろうとしない。本来なら、立ち上がり、集団を組むべきだったのだ。市民となった国で人格を保ちながら生きるという自分たちの絶対的な権利が、ほんの一瞬たりとも疑義の対象とされることのないようにすべきだったのだ。しかし、彼らはそうしなかった。彼らは頭を垂れる方を選んだ。かつて迫害の風が暗いゲットーに吹き荒れ、煙る火刑場の火をかき立てながら人々の背骨を丸め込ませ、脆弱な恐がりの心を縮みあがらせていた時代にそうしていたように。彼らは自分自身にこう言い聞かせたのだ。いずれすべては治まる、嵐が静まるのを待とう、聞こえないふりをしよう、こちらから答えさえしなければ、相手はわれわれがもういなくなったと思うだろうから、われわれのことを忘れてくれるだろうから、と。⁽⁴⁸⁾

ドレフュスの一件には一言も触れずに反ユダヤ主義批判を続行しなければならないという立場、固有名詞抜きの、まさに「ドレフュス抜き」の「ドレフュス事件」を一人で引き受けなければならないという状況に追い込まれたベルナル＝ラザールの焦りと苛立ちが如実に示されている一節である。同時に、反ユダヤ主義に対する批判の鋒先が、跳ね返って、ユダヤとして攻撃を受けながらそれを黙々と堪え忍んでいるフランスのユダヤ社会にも向けられはじめた、ベルナル＝ラザールにおける反ユダヤ主義闘争の大きな転換を印づける一節である。いまや、反ユダヤ主義がドレフュスに代表させて糾弾しているのは、大資本家、銀行家といった特定のユダヤ社会ではなく、「単なるユダヤ人、ユダヤ人そのもの」であり、その最低限の権利さえが蹂躪されているという時に、ユダヤの側に、ユダヤの名において抗議の声をあげようとする者が一人としていないという事実をどう説明したらよいのか？

十九世紀末、反ユダヤ主義の勃興を前にしたユダヤ社会の消極性、無抵抗というこの議論は、今日なお、ドレフュス事件史研究において最大の争点であり続けている。シャルル・ベギーが『われらの青春』（一九一〇年）のなかで、レオン・ブルムが『事件の思い出』（一九三五年）のなかで、それぞれベルナル＝ラザールの見解に同調しながら、「ユダヤのポリティック」（ベギー）、「自己中心的、小心なまでの用心深さ」（ブルム）を結論づけ、それが、のちのハナ・アーレント『全体主義の起源Ⅰ 反ユダヤ主義』（一九五一年）に引き継がれ、カナダの歴史家マイケル・R・マラスによる『ドレフュス事件当時のフランス・ユダヤ人』においてもおおよそ追認されたかたちとなっている。他方、ピエール・ヴィダル＝ナケは、すでにマラスの著作のフランス語訳に寄せた序文のなかで、ユダヤ資料のさらなる吟味なくては性急な結論を引き出せないとの主旨を強調し、近年では、フィリップ＝E・ランドーが、ユダヤ教大ラビ、ザドック・カーンの存在と、その水面下の、しかし実効的なドレフュス擁護運動を、未発表の資料のなか

に蘇らせようと努めている。⁽⁴⁹⁾

この論争を総轄して、ピエール・ビルンボームは、「ドレフュス事件当時のユダヤ人たちにおける消極性というテーマは、かなりの確信をもって支持されながら、その実、経験主義的実証の対象にされることすらないまま、半永久的に再燃させられている」と述べる。⁽⁵⁰⁾ たしかに、事件当時のユダヤ社会は抵抗したのか、あるいは沈黙を選んだのか、という問い、そして、ユダヤ社会はそもそも事件をどの程度ユダヤの問題としてとらえていたのか、という問いは、まさにその問いの性質上、設定時から経験主義的な実証の手段を奪われてあり、いかなる論断も単なる立場表明の堂々めぐりに行き着きかねない。たとえば、事件発生後、ユダヤ側から示された反応としてはおそらく最初のものにあたる、一八九四年十一月の『イスラエリット古文書』誌から、

ユダヤ人は——ユダヤ人として——この事件には何の関わりもたない。罪や咎は——かりにそのようなものがあつたとして——個人的なものであり、またそう考えられてしかるべきである。⁽⁵¹⁾

という一文を抜き出すことによって、現実を前にしたユダヤ側の「棄権」を強調することも可能だろう。逆に、すでに事件発生以前から国会で反ユダヤ主義に対する抗弁を繰り返していたアルフレッド・ナケの存在や、一八九三年三月、エドモン・ド・ロトシルトが、オーストリア人ジャーナリスト、イージドール・ジンガー（のちにアメリカに移り、『ジューイッシュ・エンサイクロペディア』を編集）を動かして、『ラ・リーブル・パロール』紙のむこうを張る『ラ・ヴレ・パロール（真の言葉）』紙を創刊させていたという事実を対立させることもできるだろう。また、九五年の段階で、ドレフュス擁護の運動に乗り出したのはわずかに、ベルナール・ラザール、ザドック・カーン、ジョゼフ・

レナックだけであった、と言って間違ではないが、同一の事態を指して、やはり、ユダヤ社会から出て、言論界、宗教界、政界にしかるべき地位を占めていた、その三人の人物であればこそ、ドレフュスのために最初に腰をあげたのだ、という表現もまた成り立つ。そして、早くも九五五年の春、上院、下院議員全員に抗議状を送ってはどうかというアルチュール・レヴィーの申し出を見送り、事件をユダヤ問題として政治化しようとするベルナール＝ラザールの公的発言を抑えたマチウ・ドレフュスは、結局ユダヤ系の言論人の筆を通じて公衆に訴えることに不安をおぼえ、「秘密裡に有力者にすぎる」方を選んだのだとして、アーレントの批判に値するように見えながら、他方、それが、いたずらに反ユダヤ主義の陣営に「ユダヤ同盟」を云々する口実を与えないための賢明な態度であったとして、ほかならぬ、パリの大ラビ、ザドック・カーンからの賞賛にも値するのである。さらに、ドレフュス大尉の手記、妻リュシーの公開状、マチウ・ドレフュスの回想のなかには、被告がユダヤ人として、ユダヤ人であるがゆえに裁かれたのだという認識が完全に抜け落ちているのではないか、という指摘には、公の場での発言ではないにしろ、逮捕後、シエルシュミディの監獄に繋がれていたドレフュスが絶望のなかで口走ったとされる「わたしのただ一つの罪は、ユダヤ人として生まれたことだ！」という言葉、そして、大尉の妹、ラシエル・ドレフュスが、同じ頃、軍当局に書き送った抗議文書の一節——「ユダヤ人として生まれたこと、罪としてはただそれだけの人間が現在立たされている苦境をご想像ください」——を対置しなければならないだろう。

反ユダヤ主義を前にしたフランス・ユダヤの態度決定、ユダヤとして犠牲に供された者たち自身におけるユダヤ意識——ドレフュス事件史の個別研究を越えて、のちのファシズム台頭期、さらにはナチス占領下におけるフランス・ユダヤの態度決定をめぐる議論にまで飛び火しかねない、この重要なテーマに速断は禁物である。だが、少なくとも、『誤審』の原稿を一年以上もの長きにわたって留め置かねばならないという焦慮、ドリユモンの罵詈雑言を浴びなが

ら黙して語らぬ（と、少なくともベルナル・ラザールの目には映る）フランス・ユダヤ社会に対する苛立ちとともに、ベルナル・ラザールが、途についたばかりのドレフュス擁護の運動のなかで、はじめから重苦しい不可能性の場所に立たされていたことは確かである。九六年のベルナル・ラザールは、彼自身の内部で跳ね上がろうとするバネを抑える形でしか、もはや反ユダヤ主義に対することができなくなっているのである。

よく聞いておくがいい、ドリュモン、君はユダヤ人を知らない。少なくとも、ユダヤ人のすべてを知っているわけではない。たしかに、かつての数々の迫害から、殴打を受けても抵抗せず、背骨を丸め込ませて嵐が静まるのを待ち、雷を^{いかづち}恐れて死人のふりをするという、嘆かわしい習慣を身につけてしまったユダヤ人は多い。だが、私は、それとは違う考えのユダヤ人がいることも知っている。私もその一人であるし、また、それは私一人だけではない。「……」一部のユダヤ人は、反ユダヤ主義などもうたくさんだと感じている。罵り、中傷、欺瞞の数々には飽き飽きしている。「……」遠からず、彼らは一大集団をなすであろう。そして、もしも彼らが私の言うことを信じてくれるなら、彼らは、公然と、敢然と、ドリュモン、君に対抗する連帯を組むことになるだろう。⁽⁵⁷⁾

「私もその一人である」——われわれが知る限り、これがベルナル・ラザールから発せられたユダヤ帰属性の最初の表明である。

なるほど、Aへの帰属意識は、非Aに対する抗力に起因するものであるにちがいない。「ユダヤ人が存在しなければ、反ユダヤ主義は、ユダヤ人を作り出さずにはおかないだろう」とサルトルが⁽⁵⁸⁾言い、「ベルナル・ラザールをユダヤ人に作りかえたのは、『ドリュモンの』『ユダヤ人のフランス』であった」とウィルソンが⁽⁵⁹⁾述べる所以である。し

かし、ここでは、ベルナル＝ラザールが反ユダヤ主義からの攻撃に対してばかりではなく、攻撃を受けて「背骨を丸め込ませる」ユダヤ人たちに抗して、そのようなユダヤ人たちは異なるユダヤ人として、みずからの定位をおこなっているという点に注目したい。いうなれば、ドリュモンの反ユダヤ主義のみならず、ドレフュス事件を通じてみずからユダヤの名を名乗ろうとしないユダヤ社会が、ベルナル＝ラザールをユダヤ人に「作りかえた」のである。Aであるとの理由で非Aから暴力を受け、それに対する対抗暴力として「Aであること」の意識は凝固する。しかし、それは同時に、Aと言われながらAたざろうとする者たち——非Aからの暴力にAとして反応せず、非Aへの順化、同化の姿勢すら見せる者たち——に対する嫌悪、憤りをも下地としている。そのような図式が、ドレフュス事件の政治化に先だって表明されたベルナル＝ラザールのユダヤ帰属意識のなから明確に浮かび上がってくる。

一八九六年六月、『ル・ヴォルテール』紙に寄るベルナル＝ラザールと、『ラ・リーブル・パロール』紙のドリュモンのあいだの紙上論争はクライマックスを迎える。その経緯を簡単に述べよう。

前年、九五年十月、『ラ・リーブル・パロール』社が懸賞論文を募った。課題は、「ユダヤ禍を宗教の観点ではなく人種の観点から考察した上で、フランスにおいてユダヤ権力を根絶するための実際的方法とはいかなるものであるか」というものである。応募広告に主催者ドリュモンがつけ加えて言うことには、「財界に属しておらず、よって、この課題にいくばくかの心得があるユダヤ人がもしも審査団に加わりたいと希望するなら、われわれは喜んで彼に席をひとつ用意しよう。」このような挑発を黙って見過ごすようなベルナル＝ラザールではない。さっそく同紙に公開状を送り、審査員として名乗りをあげる。彼の方でもまた、挑発の一言を添えることを忘れない。「私の絶対なる公平さに関しては安心してくださって結構。いささか先走りの感もありますが、『反ユダヤ主義が講じるべき』唯一論理的な方策があるとすれば、それは大量虐殺、つまり、新たな聖バルテルミーぐらいであろうか、と考えるもの

であります。⁽⁶⁰⁾」

ベルナルル・ラザールの参加にほかの審査員が難色を示したのか、あるいは、そのような審査会も結局ベルナル・ラザールに話題を提供するだけに終わりそうであるとドリュモンが思い直したためでもあろうか、審査は、翌九六年になっても一向に始まる気配をみせない。ユダヤ問題の早期解決のために一刻も早い審査会の開催を、と執拗に迫るベルナルル・ラザールに、ドリュモンもついに折れ、六月十日、『ラ・リーブル・パロール』編集部において第一回の審査委員会が開催される。審査委員長のモーリス・バレスを筆頭に、十五名の審査員はすべて筋金入りの反ユダヤ主義者である。論文の応募総数、一四五本。そのなかから優秀作品を選ぶにあたって、ベルナルル・ラザールは審査委員会に条件を提示した。すなわち、賞に輝いた論文をほかの場所に掲載し、それに対する審査委員としての感想を自由に述べる権利を保障すること。この一点をめぐって審査委員会は紛糾し、最終的に、「そのような要求こそ、典型的にユダヤ人のものだ」というドリュモンの発言に、ベルナルル・ラザールは武器による償いを求めた。六月十八日、サン・リトゥアンにて、ピストルによる決闘。一発ずつ銃弾を交わし、双方の命と名誉だけは守られた。⁽⁶¹⁾

『無神論者であるあなたが、こんな厄介な仕事「懸賞論文の審査」を引き受けてどうしようというのです？ ユダヤ人が攻撃にさらされているからといって、あなたに何の関係があるのですか？』こう問いただす人に、私は答えてやった。たしかに、ユダヤの宗教が攻撃されるのを耳にするだけなら、私にはどうでもよい話です。しかし、あの反ユダヤ主義の連中が、市民、人間としての私の権利を取り上げようという段になって、私がユダヤ教の典礼を守る者であるかどうかなど、気にするはがありません。ならば、どうしろというのです？」「キリスト教への」改宗はできません。私は、あらゆる信仰を、唾棄すべきとはいわずとも、不条理なものと考えて

いるからです。しかも、かりに改宗したとして、ドリユモン一派はそのような変節など何の意味もないと言うでしょうし、彼らが私をイスラエルの部族に属する者として扱うことに依然かわりはないでしょう。私は、よって、私個人の特性を守らなければなりません。ユダヤ人として生まれた以上、私はユダヤ人です。名前を変えることも、なんらかの教会、神殿、モスクの列に連なることも潔しとしません。私には、ありのままの私でいる権利があり、その権利を私は守り通すであります。そのことで誰が私を責めることができるでしょうか、と。⁽⁶²⁾

「ならば、どうしろというのか？」——周囲がどうしても自分をユダヤ人として攻撃したいというのなら、逃亡も変節もせず、そのままの自分として身を守る権利を保ち続ける。この姿勢は、のちにナチズム台頭期のドイツに青春時代を過ごすハナ・アーレントがモットーにしていたという、「ユダヤ人として攻撃されたなら、ユダヤ人として自分を守らなければならない」という姿勢⁽⁶³⁾とのあいだに完全な相似を描く。かつて、ユダヤ教、ユダヤの伝統（Judaisme）からの乖離を前提として、ベルナール＝ラザールの反ユダヤ主義闘争を支えていた「非ユダヤ主義」は、ここにいたって、ユダヤ人であること（Judaïté）の意識を前面に押し出した非宗教^{ライツク}のユダヤ主義（Judaïsme）に姿を変じているのだ。

政治化以前のドレフュス事件体験をつうじてベルナール＝ラザールのユダヤ観が根底から塗り変えられてゆく様が、これではば解明されたと思う。もっとも、こうしたユダヤ意識の凝固が一日にしてなされたわけではなく、遺稿『ヨブの積葉』に生々しく綴られているとおり、内面の激しい葛藤をとまなうものであったことは追って明らかにせねばなるまい。しかし、少なくとも彼の公の立場は定まった。ある意味では、すでに『誤審』の刊行以前にベルナール＝ラザールにとってのドレフュス事件は終焉を迎えていた、事件から——しかも、まだ公の場にはまったく持ち出され

ていない事件から——彼が引き出すべき結論はすべて引き出しおえていた、とさえ言えるかもしれない。

まず、かつてベルナル・ラザールが標榜していた「ユダヤ人」と「イスラエリット」の区別が、完全に意味を失った。典型的な「イスラエリット」といってよいドレフュス大尉が、かくも易々と反ユダヤ主義の犠牲に供されたという事実だけで、その区別は効力を失ったに等しい。そればかりか、そうした区別こそが反ユダヤ主義の温床を用意するものであることが明らかとなった。

かつて、人は、ユダヤ人ではないイスラエリットについて好意的に語っていた。たしかにその人種はほめられたものではないが、しかし常に誉れ高き例外というものはあるものだ」という具合に。ところが、ユダヤ人の皆が皆、自分を例外とみなし、必要に応じて「反ユダヤ」キャンペーンを推進する老獪な狐どもに唱和さえした。そのあいだに、反ユダヤ主義はゆっくりと発展をとげていた。⁽⁶⁴⁾

皮肉なことに、ドレフュス事件の直前まで彼自身が拠り所としていたユダヤ同化主義の歴史観、そしてその当然の帰結としてのユダヤ消滅のパスpekティブが、現実のドレフュス事件において、反ユダヤ主義に相対する上で最大の躓きの石として見えはじめたのである。市民として解放されたユダヤ人が、市民として社会に同化し、ユダヤ人と呼ばれる根拠を徐々に失う——それにともない反ユダヤ主義も自動的に消滅する——といったオプティミズムは、現実の反ユダヤ主義に対して無力であるばかりか、ユダヤそのものを考える上でまったく無効であることが証明された。ユダヤとして消滅するどころか、ますますそれとして攻撃を受けはじめたユダヤの状況そのものから出発しなければならない。それとして自らを認めたがらない人々と袂を分かってまで、あくまでそれとして立たなければならない。

「解放↓同化↓消滅」の連鎖から「現存↓異化↓自立」の連鎖へと、並べられたカードの列を逆方向から順々に裏返してゆくような発想の転換がここにはある。そしてベルナール＝ラザール以前に、フランスにおいてこのような思考の逆転経緯をたどった人物を、われわれはほかに知らない。

こうした発想の転換から生まれたのが、ほかならぬ、「ユダヤ・ナショナリズム」の思想である。以下、その内実の検討に入る前に、その誕生の契機をふたたび確認しておきたい。当時、『反ユダヤ主義、その歴史と原因』をもって「ユダヤ問題」最大の事情通と目され、事実、隆盛する反ユダヤ主義に対抗しうるフランス・ユダヤ最大の論客であったベルナール＝ラザールにおいてさえ、ある種の既存観念の呪縛から身をふりほどくためには、ドレフュス事件の衝撃と、九五―九六年、苦い足踏みの時期、もっぱら内側に向けられたエネルギー凝縮の過程を要した。これは、十九世紀末、ルナンのユダヤ史観に裏打ちされた「同化」のパラダイムから脱け出すことがいかに困難であったか、ひいては、「共和主義―ルナン―ユダヤ同化主義」という思想の連なりが、いかに求心力の強い広域磁場をそなえた思想系であったかを、反証として、如実に物語るものではないだろうか。⁽⁶⁵⁾

《ユダヤ・ナショナリズム》

一八九六年十一月、ようやく『誤審——ドレフュス事件の真実』が出版にこぎつける。押収の危険をさせてベルナール＝ラザール自身が原稿を携えてブリュッセルへ赴き、印刷を完成させ、当地から両院議員全員に一部ずつ送付、数日後には、パリのストック社からも刊行されて一般の読者の目にふれるところとなった。たしかに、この九十四頁の小冊子によって、ごく少数の人々に対してではあったが疑惑の一石を投じること成功する。しかし、著者の思惑

に反して全体的なドレフュス擁護運動にはいたらず、事件の全的な政治化のためにはそこからさらに一年以上の歳月を要することとなった。⁽⁶⁶⁾ここでは、九七年、ますます複雑をきわめてゆくドレフュス事件の表舞台からやや離れた、めだたない場所で、ひとり歩きをはじめベルナル・ラザールの「ユダヤ・ナショナリズム」に注目したい。

先だって典拠を示すことが、ここでは特に重要となる。これまで長いあいだフランスにおいても入手が困難であった、以下の四つのテキスト（うち二つは講演録をのちに活字におこしたもの）である。

——「反ユダヤ主義を前にしたユダヤ・プロレタリアート」、一八九七年二月十三日、モンマルトル友好同盟での講演。のちに、シオニスト機関誌『松明』、一八九九年一月号に掲載。⁽⁶⁷⁾

——「ユダヤ・ナショナリズム」、同年三月六日、ロシア・ユダヤ人学生協会での講演。翌一八九八年、「カディマー叢書」第一巻として、ストック社より刊。⁽⁶⁸⁾

——「自分自身であることの必要性」、「ツィーオン」、同年四月三十日号。⁽⁶⁹⁾

——「連帯」、「ツィーオン」、同年五月三十一日号。⁽⁷⁰⁾

発表の場所、そしてその聴衆（読者層）に注目しなければならない。「モンマルトル友好同盟」とは、その名からは内実がわかりにくいものとなっているが、当時ますます数を増しつつあったバリのロシア系移民労働者——その大部分はユダヤ人と考えられる——が結成した相互扶助団体である。また、「ロシア・ユダヤ人学生協会」は、帝政ロシアにおけるユダヤ人の大学入学制限 *numerus clausus* のあおりを受け、勉学の機会をバリに求めて留学してきたユダヤ家庭の子弟たち——その数は、一八九四年で五百人ほどとされる——の友好団体である。⁽⁷¹⁾一方、『ツィーオン

（シオン）』誌は、ベルリンで一八九五年六月から一九〇〇年五月まで刊行された月刊のシオニズム機関誌である。ドイツ語、フランス語、ヘブライ語で交互に号が組まれ、ベルナル＝ラザールは、一八九七年、フランス語部門の主幹をつとめた。⁽⁷²⁾つまり、九六年末、第一の『誤審』をもってドレフュス擁護の声をはじめて公のものとし、無実のユダヤ人の代弁者を買って出たベルナル＝ラザールを迎え入れ、彼に演壇、論壇を用意したのは——また彼自身、以後、積極的な語りかけの対象としてゆくのは——（言葉以前の）ドレフュス派知識人でも、フランス・ユダヤ社会でもなく、パリの外国籍ユダヤ移民、そして国際的シオニストの集団であった。

お望みなら、フランスのユダヤ人たちは放っておくことにしよう。彼らは、反ユダヤ主義の最良の手先なのだ。敵に対して行動を起こすかわりに「……」、彼らは——数少ない例外を別として——、悪をしぶしぶ受け入れる姿勢、その卑屈な態度を保つのが精一杯という有様なのである。彼らは沈黙のポリティックを唱え、すべてを時間まかせにしようとする。「……」われわれが彼らを揺り動かすことができる日がくるまで、放っておこう。彼らは少数派である。世界中で六百万人以上のユダヤ人が苦しみ喘いでいるという時に、彼ら十万人が一体何だというのだろうか？⁽⁷³⁾

その世界中のユダヤ人六百万に向けて、ベルナル＝ラザールは、反ユダヤ主義に對峙するにあたって彼自身が経験した発想の転換を説明しようとする。

そもそも、私は、反ユダヤ主義にはいかなる解決法もない、と思うばかりでなく——もっとも、反ユダヤ主義

者の側でユダヤ人に対する完全な「聖バルテルミーの夜」を用意するというのであれば話は別であるが——、どのような解決法も探すべきではない、と考える。

それは、反ユダヤ主義者の思うがまま、彼らに対して何もせず、あらゆる侮辱を堪え忍び、その殴打に進んで身を差し出せ、ということの意味するのか？ もちろん、否である。「……」依然、闘わなければならない。抗議の声をあげなければならない。しかし、それは何のためか？「……」ユダヤ人が自分自身の身を守らなければならないのは、自分自身に対する最低限の義務によってなのである。あらゆる人間存在は、存在したいと願う以上、抵抗の力を示し得るようになってはならず、みずからの全的な発展、存在する自由、自分自身として存在する自由を保ち続けるために、あらゆる努力を払わねばならない、という理由によるのだ。⁽⁷⁴⁾

説かれているのは、記事のタイトルそのままに、「自分自身であることの必要性」である。ベルナルルラザールが、ある時点から反ユダヤ主義をなんらかの解決を与えるべき「問題」としてとらえることをやめ、その「問題」そのもののからの解放を指向しはじめていることを示す、きわめて重要な一文である。これは、ユダヤが、非ユダヤ、反ユダヤとの関連においてしか自己を考えることができなくなっていることへの警鐘であり、また、「解放」(emancipation)という言葉が、ゲットーから出て市民社会に加わることを意味し終えたのち、次なるステージにおいては、同化/非同化の思考の枠そのもののからの脱出を意味するものでなくてはならない、という思想への発展をあとづけるものである。非Aに対する抗力から（また、非Aからの暴力に「背骨を丸め込ませる」Aの要素に対する反発から）生まれ落ちた「Aであること」の意識ではあっても、本源的には、そもそも非Aなど存在せずとも（また、非Aに同化しようとする一部のAの思惑ともまったく関わりなく）、もっぱら自分自身として存在する自由という、譲渡不可

能な個体の権利に由来するものでなくてはならない、というのだ。

「ユダヤをキリスト教化するどころか、逆にユダヤ人をユダヤ化しようではないか」⁽⁷⁵⁾——大革命以降のフランスや、自由主義政体が敷かれたほかの国々で市民権を与えられ、ゼロの状態で何かを「受け取った」と信じ込んでいるユダヤ人たちの目を覚ましてやらなくてはならない。市民権の獲得、それは「ただ単に、それまで不当に奪われてあったものを取り戻したにすぎないのだ」ということ、たとえ権利の回復とともに市民の義務を果たさなければならなかったからといって、それと引き替えに「自らの大切な過去の思い出を忘却したり、自らの人格を放棄したりすることを強制されているわけではないのだ」⁽⁷⁶⁾ということ、つまり——ベルナール＝ラザール自身がその言葉を用いているわけではないが——、既存国家への政治的「統合」(integration)は、決して社会的「同化」(assimilation)を意味するものではないのだということを、まず「解放ユダヤ人」たちに教えてやらなければならない。

ついで、このように述べるベルナール＝ラザール自身が「Aであること」を認めていなかった過去の清算、いわば「否認の否認」がおこなわれる。

永遠のユダヤ人、伝説の *Ewige Jude* の杖をまだ手に握りしめているような人々とは同じ一族に属していないというだけで、鼻高々だった時期があったものだ。受けた教育がそうであった以上、やむを得ないことではなからうか。私自身、そうした恥の感情を抱いたことがあったので、よく理解できる。以前の私はセファス「ペトロの別称」に似ていた。私も「我その人々を知らず」と言った。しかし、私は最後まで彼に似ていたといえるだろう。なぜなら、その人々をいったん否認したのちに、彼らの苦難の旅に同行してどこへでも行く覚悟ができたからだ。しかも、いまでは彼らの解放に力をかす覚悟もできているのだから、これは、セファスよりもさらに遠くまで歩

を進めることを意味している⁽¹⁷⁾。

ならば、「その人々」を認知すること、彼らを「知っている」ということの根拠は何か？ ロシア・ユダヤ人学生協会の招かれ、ロシアのみならず、ポーランド、ルーマニア、オーストリア、そしてフランスのユダヤ人からなる聴衆を前にしておこなった講演「ユダヤ・ナショナリズム」の冒頭で、ベルナルル・ラザールははっきりとした回答を与えようとする。

では、われわれの連帯ともいうべき、この感覚の源をどこに求めたらよいのか？ それは、まず、一つの共通の過去、しかもごく最近の過去のなかである。解放ユダヤ人は、多くの場合、成り上がり者 (Parvenu) として振る舞い、みずからの惨めな祖先の存在を忘れている。「……」西欧のユダヤ人のなかには、現在そのあいだに混じって生きている民族に同化したい一心で、この一世紀の過去を忘れようと努力した者もいる。しかし、それまで十七世紀にもわたる年月が刻んできたものを自らの精神と心から消し去ることに、彼らは果たして成功したのだろうか？ たかだか百年が何だというのか？ そのようなもので、何千年にもわたって築き上げられてきたものを廃棄できるのだろうか？⁽¹⁸⁾

先に見た、九四年、アムステルダム・ゲットー訪問の印象が再び取り上げられるのは、まさにこの文脈においてである。

ユダヤ逃亡民の群れが、略奪、拷問、火刑台を逃れて、四方の道に溢れ出た、あの過去の時代。悲惨、絶望、諦め、そして英雄的なまでの粘り強さ、そうしたものが織りなしてきた幾世紀もが眼前に蘇ってきた。伝説のアハスヴェルス、あの永劫の惨めなさすらい人が、私の目の前を横切ってゆくように思われた。たとえ現代の反ユダヤ主義をもってしても、そうしたことを我々の記憶から抹消することはできない。ここにこそ、我々を互いに結び付ける、ひとつの生きた絆があるのだ。すなわち、共通の歴史という絆である。⁽⁷⁹⁾

こうして、「現在のなかの過去」として生き続ける民族の記憶に根拠をおいた、ユダヤ・ナショナリズムが提唱されることとなる。

ユダヤの民族性(nationalité)が存在するという、この事実が、たしかにもっぱら反ユダヤ主義者たちによってのみ認められ、一部のユダヤ人からは却下されているものだ。「……」だからといって、事実そのものを否定する理由にはならない、と私には思われる。その事実が、まさに明証によって裏打ちされたものだから。繰り返すが、いま、私の目の前に見えているのは、何百万という人間の集団である。彼らは、幾世紀にわたって、内外の同じ法に従い、同じ掟のもとに生活し、同じ思想、同じ風習を保ってきた人々である。これら何百万の人々は、いまだに同じ名を名乗り、互いに結びつきを感じ、同じ集団(groupe)への帰属意識がある。そこから引き出すべき結論はなにか？⁽⁸⁰⁾ ほかならぬ、これら数百万の人々が、ひとつの民族(nation)を形成しているということである。

ここでも、やはり、反ユダヤ主義とユダヤ同化主義の両者を睨みながら、双方のユダヤ観に抗する形で、しかも、あくまでそれにとらわれないものとして、ユダヤの *nationalité* を打ち立てようとするベルナル・ラザールの論の運びには細心の注意がこめられている。これまで「諸国民のなかの民族」(*la nation parmi les Nations*)、⁷「国家のなかの小国家」(*l'état dans l'état*)を形成するものとして、反ユダヤ主義者たちにあげつらわれ、もっぱら否定的に扱われてきたユダヤの民族性。他方、ユダヤ人が帰属する国家 (*Etat*) に市民 (*citoyen*) として統合された以上、同化、吸収の過程を経て消滅に向かうべきものとして、西欧のユダヤ人たちから存在意義さえ否定されたユダヤの民族性。それに対してベルナル・ラザールは、「共通の過去」を絆とする民族性なるものを、どのように実現していくかとするのか？

ユダヤ人にとって、ナショナリズムという言葉は何を意味するのか？ むしろ何を意味すべきなのか？ 今日、ユダヤ人が「私はナショナルリストだ」と言うとしても、それは、特殊、厳密、明確な意味において、私はパレスチナにユダヤ人国家を再建し、エルサレムを獲得せんと夢見る人間である」と言っていることにはならない。彼はむしろこう言っているのだ。「私は全的に自由な人間でありたい。太陽を享受したい。みずからの人間としての尊厳に対する権利を保持したい。私の上に降り注ぐ、抑圧、侮辱、軽蔑を逃れてありたいのだ。」⁽⁸¹⁾と。

「諸国民のなかの民族」として「国家内国家」を形成する望みしからぬ集団として糾弾されるならば、集団を小文字の *nation* (民族) から大文字の *Nation* (国民) に変え、それに大文字の国家 (*Etat*) の枠を保証すべきであるとするシオニズムは、解決策として、たしかに順当な、素直なものであるかもしれない。しかし、ベルナル・ラザール

ルは、あきらかにシオニズムを意識した上で、この時点では結論を「国家建設」の方向には求めず、あえてユートピアの領域にヴィジョンを解き放とうとしているようにみえる。

いつの日か、人類が、資本主義体制によって組織されたものではない、自由集団（groupements libres）の連合のようなものになるだろう、と私は信じている。その自由集団の内部では、富の分配と労働・資本の関係が、今日とはまったく異なった仕方で行われるのだ。もちろん、こうした諸集団の構成、形成が可能となる条件をまず整えなくてはならない。だが、そうなった時に、集団の一つをユダヤ人たちが形成してはいけないという法があるだろうか？⁽⁸²⁾

記録によると、前年九六年七月、ベルナール＝ラザールはパリでヘルツルに会っている。この「自由集団」の構想が、シオニズムとどのように触れ合い、どの地点から決裂してゆくかを、追って慎重に見極めなければならない。

（続）

- (1) ハナ・アーレント、「隠された伝統」、『バーリアとしてのユダヤ人』所収、寺島、藤原訳、未来社、一八九八年、五二頁。
- (2) 総題「ドレフュス事件のなかの「科学」」のもとに連載の拙稿、「考古学・ルナン・反ユダヤ主義」、「筆相学・ベルティヨン・人間測定法」、「資料」の意味、『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会（順に、九号、一九九三年、八一〜一〇一頁／十一号、一九九四年、一七〜四四頁／十二号、一九九五年、四七〜七四頁）、ならびに「シャルル・ベギー」、日本フランス語フランス文学会『関東支部論集』5（シンポジウム「ドレフュス事件が意味するもの——一〇〇年の区切りを経て」）、

一九九六年、三〇〜三八頁。

(3) ラザール・マルキュス・マナセ・ベルナル (Lazare-Marcus-Manassé Bernard, 1865-1903) は、一八八六年、パリへ出て文筆活動を始めると同時に Bernard-Lazare の筆名を用いている。

(4) 既出拙稿「資料」の意味」参照。

(5) エミール・ゾラ『共和国大統領フェリックス・フォールへの手紙』の結論部分に繰り返し用いられ、クレマンソーが記事の大見出しとして取り上げた『accuse...』という表現が、すでにベルナル・ラザール『いかにして無実の人間を罰するか』結論部に、やはりリフレインのように用いられているという事実注目する者は少ない。

(6) Lettre non datée de Bernard-Lazare à Joseph Reinach, Bibliothèque Nationale de France, cabinet des manuscrits, N. A. F. 24897 f. 223; extrait dans Robert Gauthier, *Dreyfusards*?, Coll. Archives, Gallimard/Juliard, 1965, p. 95

(7) 邦訳で読めるものとして、ベルナル・ラザールへの言及は充実したものとはいないが、ウォルター・ラカー『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』(新版、高坂誠訳、第三書館、一九九四年)を参照。

(8) 晩年のベルナル・ラザールに関して、一九〇一年頃から彼の数少ない対話者となっていたシャルル・ベギーによるふたつの文章『ベルナル・ラザール』(遺稿)、『われらの青春』(一九一〇年)、『そしてアラン・フィンケルクロート』、『非同時代人』(Alain Finkielkraut, *Le Mécontemporain*, Gallimard, 1991)を参照。

(9) Bernard Lazare, *Juifs et antisémites*, édition établie par Philippe Oriol, Editions Alia, 1992; Michael R. Marrus, *Les Juifs de France à l'époque de l'affaire Dreyfus*, traduit de l'anglais par Micheline Legras, préface de Pierre Vidal Naquet, Calmann-Lévy, 1972; Nelly Wilson, *Bernard-Lazare—l'antisémitisme, l'Affaire Dreyfus et la recherche de l'identité juive*, traduit de l'anglais par Ch. et D. Gallagher, Albin Michel, 1985

(10) Wilson, *op. cit.*, pp. 19-21

(11) Marrus, *op. cit.*, pp. 193-194

(12) Wilson, *op. cit.*, p. 23

- (13) Michel Winock, *Edouard Drumont et Cie—antisémitisme et fascisme en France*, Seuil, 1982 ならびに、内田樹「エドゥアール・ドリュモンと反ユダヤ主義原理論」、東京都立大学『佛文論叢』一号（一九八四年、二五―五六頁）、二号（一九八五年、七九―一三五頁）、三号（一九八六年、一―四四頁）／内田樹「反ユダヤ主義の哲学——マルクスからドリュモンへ——」、東京都立大学『人文学報』一九七号、一九八八年、一―三六頁。
- (14) Wilson, *op. cit.*, p. 108
- (15) 《La Gloire de Judas》, *Le Miroir des légendes*, Alphonse Lemerre, 1892, pp. 116-118
- (16) *Ibid.*, p. 119
- (17) Nelly Wilson, 《L'Amitié entre Péguy et Bernard-Lazare》, *L'Amitié Charles Péguy*, mars 1981, pp. 17-18
- (18) 既出拙稿「考古学・ルナン・反ユダヤ主義」参照。
- (19) Marrus, *op. cit.*, pp. 24-30
- (20) ベルナル＝アンリ・レヴィ、「フランス・イデオロギー」、内田樹訳、国文社、一九八九年、一〇七頁。
- (21) 既出拙稿「考古学・ルナン・反ユダヤ主義」、九六―九七頁参照。
- (22) 《La solidarité juive》, *Entretiens politiques et littéraires*, no 7, 1er octobre 1890 ; repris dans *Juifs et Antisémites*, *op. cit.*, p. 12
- (23) 《Juifs et Israélites》, *Entretiens politiques et littéraires*, no 6, 1er septembre 1890 ; *ibid.*, p. 3
- (24) *Idem.*
- (25) 《Synthèses de l'antisémitisme par Edmond Picard》, *Entretiens politiques et littéraires*, no 27, juin 1892 ; *ibid.*, p. 34
- (26) 《Juifs et Israélites》, art. cit., *ibid.*, p. 7
- (27) 《La Solidarité juive》, art. cit., *ibid.*, p. 20
- (28) *L'Antisémitisme, son histoire et ses causes*, Léon Chailley, 1894 ; rééd. Les Editions 1900, 1990, pp. 401-402
- (29) 《La Nationalité française et les Juifs》, *Juifs et Antisémites*, *op. cit.*, p. 55

- (36) Wilson, *op. cit.*, pp. 148-158
- (37) 《L'Âme du philosophe》, *Le Journal*, 24 septembre 1894 ; repris dans *Juifs et antisémites*, *op. cit.*, pp. 59-60
- (38) *Ibid.*, pp. 60-61
- (39) 《Le Nationalisme juif》, repris dans *Juifs et antisémites*, *op. cit.*, pp. 141-161
- (40) 《L'Âme du philosophe》, *ibid.*, p. 60
- (41) 《Le Nationalisme juif》, *ibid.*, p. 144
- (42) 《L'Âme du philosophe》, *ibid.*, p. 60
- (43) 《Le Nationalisme juif》, *ibid.*, p. 144
- (44) Charles Morice, *Du Sens religieux de la poésie*, Vanier, 1893, p. 47
- (45) Wilson, *op. cit.*, p. 296
- (46) Jean-Denis Bredin, *L'Affaire*, Fayard, 1983, p. 83 ; Jean-Denis Bredin, *Bernard-Lazare*, Fallois, 1992, p. 142 以下。
- (47) Lettre non datée de Bernard-Lazare à Joseph Reinach, Bibliothèque Nationale de France, cabinet des manuscrits, N. A. F. 24897 f. 213 ; Gauthier, *op. cit.*, p. 83
- (48) 《Le Nouveau Ghetto》, *La Justice*, 17 novembre 1894
- (49) *Idem.*
- (50) Paul-Victor Stock, *Mémoires d'un éditeur*, 3e série, L'Affaire Dreyfus, Stock, 1938, p. 18
- (51) *Une Erreur judiciaire : l'affaire Dreyfus, le deuxième mémoire*, Stock, 1897, p. 9 ; rééd. Editions Albin, 1993, p. 6
- (52) 既出拙稿「資料」の意味。マチュとドゥペンジュは、ただ存在だけが確かめられていた「あのD……の奴が」なる文書を重要視するあまり、その内容をめぐってさまざまに交錯する情報に逆に足をとられて身動きできなくなる。また、当時の共和国大統領フェリックス・フォールを含む政治家たちに対する働きかけの效果に、最後まで期待をかけたままに面もある。それに対し、ベルナルール・ラザールは、政界の大物たちの意向はもとより、秘密書類や真犯人「D……」の存在などに

ならずとも、九四年裁判に関する資料だけから出発して、裁判の非合法性を立証できるようではならないというヴィジ
ョンを、当初から一貫して主張していた。

- (47) Lettre déjà citée de Bernard-Lazare à Joseph Reinach, l. 215 ; Gauthier, *op. cit.*, p. 85-86
- (48) *Contre l'antisémitisme*, Stock, 1896 ; repris par Oriol dans *Juifs et antisémites*, *op. cit.*, p. 95
- (49) Philippe E. Landau, *L'Opinion juive et l'affaire Dreyfus*, Albin Michel, 1995
- (50) Pierre Birnbaum, « Les Juifs entre intégration et résistance », in *La France de l'affaire Dreyfus*, Gallimard, 1994, p. 514

- (51) *Les Archives israéliennes*, 8 novembre 1984 ; cité dans Landau, *op. cit.*, p. 15
- (52) Marrus, *op. cit.*, pp. 171-173
- (53) Bredin, *op. cit.*, p. 116 note
- (54) ハナ・アーレント『全体主義の起源ー反ユダヤ主義』、大久保和郎訳、みすず書房、一九七二年、二〇二頁。
- (55) Landau, *op. cit.*, p. 23
- (56) Michael Burns, *Histoire d'une famille française, les Dreyfus*, Fayard, 1994, p. 359
- (57) *Contre l'antisémitisme*, *op. cit.*, pp. 99-100
- (58) ジャン＝ポール・サルトル『ユダヤ人』、安堂信也訳、岩波新書、九頁。
- (59) Wilson, *op. cit.*, p. 127
- (60) *Contre l'antisémitisme*, *op. cit.*, pp. 112-113
- (61) Wilson, *op. cit.*, p. 124
- (62) *Contre l'antisémitisme*, *op. cit.*, p. 114
- (63) ハナ・アーレント「何が残ったか？ 母語が残った」『思想』、一九九五年八月、一六三頁。
- (64) « L'Equivoque antisémite », *Le Voltaire*, 28 juin 1896 ; *Juifs et antisémites*, *op. cit.*, p. 123

(65) われわれが、ここで「共和主義—ルナン—ユダヤ同化主義」としていかにも乱暴にまとめておいた思想系は、ルナン思想の全容解明とともに、さらなる精緻な分析に値するだろう。その分析過程においては、ベルナル・ラザールの発想転換が、のちのドレフュス派、ユダヤ社会はもとより、今世紀前半のフランス知識層の受け入れるところとは決してならなかったという事実とともに、彼の「脱ルナン化」が、ルナン思想のもう一つの重要な側面としてある「植民地同化主義」のイデオロギ―から脱出するための、せめてもの手掛かりとして、反植民地主義の思想へ転化させられることもなく、数十年間（おそらくフランツ・ファノンまで）持ち越されなければならなかったという現実が、あらためてわれわれに突きつけられることとなる。

(66) 既出拙稿「『資料』の意味」参照。

(67) 《Le Proletariat juif devant l'antisémitisme》, conférence donnée le 13 février 1897 à la Ligue fraternelle de Montmartre; publié dans *Le Flambeau*, janvier 1899; reproduit dans *Juifs et antisémites*, op. cit.

(68) 《Le Nationalisme juif》, conférence donnée le 6 mars 1897 à l'Association des étudiants israéliques russes; publié comme "Publications du Kadimah" no 1, Stock, 1898; repris dans *Le Furnier de Job*, Strasbourg, Circé, 1990; reproduit dans *Juifs et antisémites*, op. cit.

(69) 《Nécessité d'être soi-même》, *Zion*, 30 avril 1897

(70) 《Solidarité》, *Zion*, 31 mai 1897／のちにベルナル・ラザールは、「自分自身であることの必要性」「連帯」の二つのテクストをつなぎ合わせ、題も「ナショナリズムとユダヤ解放」(《Le Nationalisme et l'émancipation juive》)と改めて『レコー・シオニスト』(《Echo sioniste》)誌、一九〇一年三月二〇日、四月五日、五月五―二〇日号に連載している(同誌は、前記「松明」誌 *Le Flambeau* の後身として、一八九九年九月に創刊されたもの)。この改訂稿のみ、既出論集 *Juifs et antisémites* に収録されているが、かなりの変更、加筆を経ているため、一八九七年時点でのベルナル・ラザールの思想を判断する材料としてはふさわしくない。

(71) Wilson, op. cit., p. 305; Marrus, op. cit., pp. 64-66／後者「ロシア・ユダヤ人学生協会」は、一八九六年から隔月誌『カ

ディマー』(「プライ語で「前へ」あるいは「東へ」を意味する)を刊行していた。ベルナール＝ラザールの「ユダヤ・ナシヨナリズム」を第一巻とする「カディマー叢書」は、同協会により、雑誌とは別に企画された叢書である。以上二つのロシアンユダヤ団体とベルナール＝ラザールとの出会い、その関係をめぐっては、今日、資料がほとんど失われており、ウィルソン自身、いまだに実状を明確に把握していない。一八九〇年代、パリにおける東欧ユダヤ人労働者、留学生の実態、彼らと社会主義思想、アナキズム、シオニズムとの関わりなど、ここには重要な歴史研究課題が山積しており、若干の既存研究書に基づいて概要を示すだけでも、とても本稿の紙面にはおさまらない。あらためて、別の考察の機会を待ちたい。

(72) この刊行物の所在をつきとめるためにご尽力下さった、パリ留学中の王寺賢太氏、ベルリン留学中の縄田雄二氏、またフライブルク大学図書館に謝意を申し添えたい。

(73) 《Le Nationalisme juif, Juifs et antisémites, op. cit., p. 151

(74) 《Nécessité d'être soi-même》, *Zion*, 30 avril 1897, p. 3

(75) *Ibid.*, p. 4

(76) 《Solidarité》, *Zion*, 31 mai 1897, p. 24

(77) *Ibid.*, p. 25

(78) 《Le Nationalisme juif》, *Juifs et antisémites, op. cit.*, pp. 143-144

(79) *Ibid.*, p. 144

(80) *Ibid.*, p. 146

(81) *Ibid.*, pp. 155-156

(82) *Ibid.*, pp. 152-153